

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24501210

研究課題名(和文) 大学授業の改善 学生による授業コンサルティングの導入と訓練プログラムの開発

研究課題名(英文) Improvement of the Class: Introducing Students Consulting on Teaching (SCOT) and the Development of Training Programs for SCOT Students

研究代表者

井上 史子 (Inoue, Fumiko)

帝京大学・高等教育開発センター・教授

研究者番号：80589945

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、より学生の視点を取り入れた大学授業の改善を図ることを目指し、「学生による授業コンサルティング(SCOT)プログラム」の導入とコンサルティングを担当する学生の訓練プログラムおよび効果検証のための調査手法を開発することを目的としている。SCOTプログラムとは、希望する教員に対して、授業内活動に関する情報を学生の視点から収集して提供する学生参画型の授業改善プログラムである。

研究成果より、SCOTプログラムは学習者中心の授業に対する教職員の意識改革に貢献することや、大学教育の質向上に学生の主体的参加を促す働きがあることなどが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study seeks to achieve improved teaching by introducing SCOT (Students Consulting on Teaching) and developing training programs for student consultants.

The SCOT program offers teachers the opportunity to receive feedback on class activities from an unbiased student perspective. It supports student-centered learning; a shift from the traditional, i.e., teacher-centered, approach. SCOT students, therefore, become critical agents of change in this effort.

研究分野：高等教育開発

キーワード：授業改善 組織的FD 学生参画 student engagement 正課外学習 訓練プログラム

1. 研究開始当初の背景

ファカルティ・ディベロップメント (FD) の義務化以降、多くの大学で授業改善に向けたさまざまな取組が行われていることは周知である。授業改善に用いられる方法としては公開授業や授業研究、先輩教員や同僚教師相互による授業コンサルティングが一般的であるが、それ以外にも、学生による授業評価アンケートや授業内でのコメントシートなどが用いられている。前者が教員の視点からの授業改善であるとするれば、後者は学生の視点を取り入れた授業改善であると考えられるが、必ずしもこれらの方法が上手くいっているとは言えない状況がある。

大学行政管理学会経営評価表研究会/社団法人日本能率協会による「第2回大学教育力向上に関する調査(2010年)」において、実施率は高いが機能度が相対的に低い施策の一つに「授業評価」が挙げられている。すなわち、多くの大学で実施されていながら、あまり有効活用されていないのが学生による授業評価アンケート等による「授業評価」であり、このことは各大学のFD担当者の多くが課題としていることでもある。近年の「学習者中心の教育」への流れをみれば、授業を受ける主体である学生の視点を授業改善に取り入れることは当たり前とも言えるにも関わらず、研究開始の状況においては学生の視点を取り入れるための方法は少ない上に、有効活用されていないと言える。

国際的な「教育の質保証」への動きにおいても、「学生が修得すべき学習成果を明確化することにより、『何を教えるか』よりも『何ができるようになるか』に力点が置かれている」(川島、2010)として、学生の能動的な学習を促すような授業が今後、益々求められてくることは必須であり、教員にとっても旧態依然とした講義形式の授業からの転換が必要となる。その際に手掛かりとなるのはやはり学生の視点から見た効果的な授業であり、授業評価アンケートやコメントシート以外の方法として、学生が直接教員と面談する授業コンサルティングなど、新たな方策の導入が期待されている。

2. 研究の目的

本研究は、より学生の視点を取り入れた大学授業の改善を図ることを目指し、「学生による授業コンサルティング (Students Consulting on Teaching : SCOT)」の導入と授業コンサルティングを担当する学生の訓練プログラムの開発、及び効果検証のための調査手法の開発を目的とする。大学授業の改善に向けた取組は、公開授業や授業研究、同僚教員による授業コンサルティング等が一般的であるが、学生の意見を直接聞くことにより改善に繋げようとする取組はあまり行われていない。

本研究では、訓練を受けた学生による授業コンサルティングの大学授業への導入を提

案するとともに、訓練プログラムの開発及びその効果検証について実証的な研究を行う。

3. 研究の方法

研究の1年目(平成24年度)は、研究代表者及び研究分担者が所属する大学において、学生による授業コンサルティングを導入するための体制づくり、訓練プログラムの開発、及び効果検証のための調査手法の検討を行った。2年目(平成25年度)は、研究代表者、研究分担者それぞれの大学において、実際に「学生募集-参加学生の訓練-学生による授業コンサルティングの試行実施-成果検証」といった一連の活動を試みた。3年目(平成26年)は、学生による授業コンサルティングの成果について、学生側・教員側の双方を対象としたアンケート調査やインタビュー調査をもとに成果検証を行った。

なお、最終年度には成果報告書をまとめ、研究成果について広く周知を図った。また、研究の進捗にあわせ、幅広い議論のため、国内外の学協会等で報告・発表を行った。

4. 研究成果

(1) 教員および学生への効果

本研究の成果として、一つ目は、学生中心の授業に対する教職員の意識改革に貢献したことである。専門的な訓練を受けた学生による助言や提案は、プログラムに参加した教員からも高い評価を得ており、本学におけるFD活動をより推進する原動力ともなっている。例えば、平成24~25年度に本プログラムを希望した教員に対して行った事後アンケートに対して、回答のあったほぼ全員が「とても満足した」「まあ満足した」と回答(図1、有効回答数17名)しており、「大変受けやすいプログラムであるうえ、得るものが大きいです。普段気づいていない点を指摘してもらえたので、これからの授業で応用できます。」「打ち合わせの際に、専門にしてみなかつた分野である教育方法や授業スタイルに関して自分が持っていた質問や疑問についても意見をシェアしてもらったので満足しました。」などといった感想も得られた。

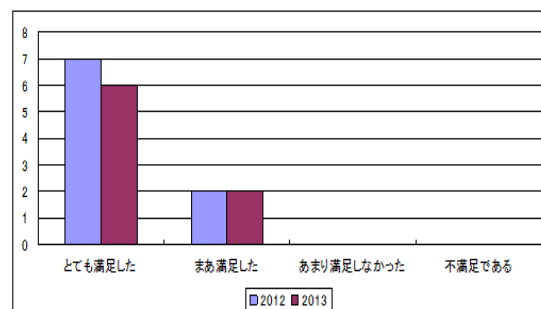


図1 SCOTプログラムを受けての満足度

また、教員が学生からの助言や提案を受けてどのように授業改善を行ったかについては、以下のようなケースが最終年度に行った

インタビュー調査より明らかになった。

＜ケース 1 (H24・25 参加, 50 代, 男性教員, 事後アンケートより)＞

「第三者による客観評価として高評価で安心しました。授業改善アイデアとして、クイズの提言が記載されていましたが、授業中は絶えず受講者にマイクを渡して意見を求める機会を設けており、事実上のクイズと同様の効果はすでに十分実現できているため、あえてクイズ形式を取り入れる必要もないかなと受け止めました、後日、受講生に SCOT プログラムと本学の FD 活動について説明し、当授業の改善策を尋ねたところ、クイズは不要という意見が出されました。」

＜ケース 2 (H23・24 参加, 30 代, 女性教員, インタビューより)＞

「SCOT のレポートに、授業でビデオを使った時は学生の反応がよかったり、集中できていたというようなことが書いてあったので、これは大人数の講義では有効な方法だったと確認できたので、次の年からは積極的に用いるようになりましたね。それから、大きな教室の後ろの方ではあまり集中できていない学生が多いというようなことも書かれていたので、時々、後ろの方を歩いて見廻るようになりました。」

ケース 1 は、すでに学生とのコミュニケーションは取れている教員が、SCOT 学生からの提案を受け、改めて自身が行っている授業方法について受講学生と検討する場を設けるといった行動を起こした例である。ケース 2 は、大規模授業での学生の反応を具体的に知ることにより、視聴覚教材の有効性を確認した上で授業設計に組み込んだり、授業内での自身の行動を変化させたりすることに繋がった例である。

研究成果の二つ目は、プログラムに参加する学生自身の大学での学習に取り組む意義の見直しに繋がっていることである。「もっと学びたい、成長したい」という思いをもつ学生にとって、本プログラムは大学での幅広い学びと活躍の場を提供するとともに、同じ志をもつ学生同士が切磋琢磨し合う「学びの場 (learning community)」ともなる可能性が学生へのインタビューより示唆された。表

1 は、インタビュー協力者一覧と各自の参入動機を示したものである (調査は平成 26 年度に森が実施)。

表 1 インタビュー協力者一覧と類型 (森、2015)

協力者	所属	性別	参入からの年月	参入動機
協力者A	4年	男	2年2ヶ月	大学及び大学の授業への関心
協力者B	3年	女	1年2ヶ月	正課外学習への期待
協力者C	3年	男	1年2ヶ月	大学及び大学の授業への関心
協力者D	2年	女	1年2ヶ月	正課外学習への期待
協力者E	2年	女	1年2ヶ月	教授技術への関心
協力者F	2年	男	1年2ヶ月	教授技術への関心
協力者G	2年	女	1年2ヶ月	正課外学習への期待
協力者H	2年	男	1年2ヶ月	教授技術への関心
協力者X	2013年卒	女	3年	正課外学習への期待
協力者Y	2013年卒	男	1年6ヶ月	大学の授業及び組織への関心

## (2) 訓練プログラムの開発

本プログラムの特長は、教授・学習に関する訓練を受けた学生が授業コンサルティングを行うことにある。したがって、教員からの要望に応えるだけの知識や技能、態度を SCOT 学生に習得させるための訓練プログラムは重要である。筆者らは、すでにアメリカにおいて本プログラムの実績があるブリガムヤング大学およびユタ・バレー大学の訓練プログラムを参考に、表 2 に示すような改編した訓練プログラムを開発した。

なお、日本ではアクティブ・ラーニング実施に対する教員からのニーズも増えてきていることから、ファシリテーションに関するトレーニングも加えていることや、実際にコンサルティングに入る前の準備として、模擬コンサルティングのためのインターンシップや調査研究などのプログラムも課していること、コンサルティングを担当できる学生 (SCOT シニア) と未だトレーニング段階にある学生 (SCOT トレーニー) の二段階に分けて訓練を行っていることなどが、アメリカ版の訓練プログラムとは異なる特徴である。

表 2 SCOT 訓練プログラム一覧

	テーマ	内容	形態
1	オリエンテーション	1. SCOT とは 2. トレーニング受講のために 3. SCOT ポートフォリオの説明	講義
2	高等教育について知る	1. 日本の高等教育 2. 国際的な高等教育の動向 3. 能動的な学びとは (アクティブ・ラーニング)	講義 ディスカッション
3	大学について知る	1. 大学の組織 2. 自分の大学を知る 3. 先輩 SCOT に学ぶ (大学での学び)	講義 発表
4	大学授業について知る	1. 基本的な教授・学習方法	講義 ディス

		2. 学習者中心のシラバスとは 3. 観点別到達目標と授業設計	カッ シ ョ ン
5	授業支援について知る	1. 教室空間でのファシリテーションとは何か 2. 授業時に必要なファシリテーションを体験する	講義 演習
6	コミュニケーショントレーニング	1. 受容的に聴く態度－イヌバラ法－ 2. 情報を読み取るカーフォトラングージ－ 3. 柔軟に対応するカーアサーション・トレーニング	演習
7	SCOT としてのスキルアップのために	1. シラバスコンサルティングの方法 2. 授業観察レポートの書き方 3. 教員との面談方法（ロールプレイ）	講義 演習
8	選択課題	グループで選択したテーマについて、調査・研究、発表、意見交換まで学生主体で行う	調査・ 研究 発表
9	インターンシップ	教員に協力を依頼し、実際のコンサルティングとファシリテーションを体験する	体験

### (3) 海外の大学との連携

グローバル化が進む中で、大学教育の質保証に関する取組もまた国際的な視野に立って進めることが重要である。

本取組においては、SCOT プログラム自体がアメリカの大学において開発されたものであることから、それを日本の大学で実施するためには改変や工夫が必要となる。そのための助言や支援を得ることを目的に、当初よりブリガムヤング大学（アメリカ・ユタ州）の Center for Teaching and Learning (CTL) とユタ・バレー大学（アメリカ・ユタ州）の Faculty Center for Teaching Excellence (FCTE) の教員および SCOT 学生と連携して本研究に取り組んだ。

平成 25 年度には、海外講師や学生を招いての国際シンポジウム（写真 1、平成 26 年 3 月 11 日、テーマ「日米 FD センターによる Student Engagement（学生による能動的学修）をキーワードとした組織的 FD 推進の意義と展開可能性」）も実施した。

また、平成 25 年度、26 年度には、両大学の教員と学生を招き、日本の SCOT 学生との一泊二日での合同勉強会も実施した。本勉強会では、相互に訓練プログラムの実施状況を

報告するだけでなく、各大学で考案したプログラムを実際に体験したり、今後の連携のあり方などについてのディスカッションを行った。（写真 2）



写真 1 国際シンポジウム（平成 26 年 3 月 11 日）



写真 2 三大学合同 SCOT 勉強会（平成 27 年 3 月 9 日、10 日）

さらに、平成 26 年度には三大学が共同して、高等教育に関する国際学会において本取組に関する発表を行い、世界の FD 関係者と本取組について幅広い意見交換も行った。

#### <引用文献>

- ①井上史子「平成 24～26 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C)：大学授業の改善－学生による授業コンサルティングの導入と訓練プログラムの開発－」成果報告書、2015

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- ①沖裕貴、ピア・サポート・プログラム－立命館大学、IDE 大学協会「IDE 現代の高等教育」、査読無し、No. 546、2012、pp. 54-59

〔学会発表〕（計 10 件）

- ①井上史子、森玲奈「学生による授業コンサルティング(SCOT)プログラムがもたらしたもの－教員、FD センターに焦点をあて

てー」、第 21 回大学教育研究フォーラム、2015 年 3 月 13 日～14 日、京都大学（京都府・京都市）

- ② 森玲奈、井上史子「学生による授業コンサルティングにおいて学生は何を学んでいるのか」、第 21 回大学教育研究フォーラム、2015 年 3 月 13 日～14 日、京都大学（京都府・京都市）
- ③ Anton Tolman, Trevor Morris, Susan Eliason, Gary Tsuchimochi, Fumiko Inoue and Lynn Sorenson, Student Involvement in Faculty Development: Impact on Students and Faculty, The International Higher Education Teaching and Learning Association (HETL) 2015, January 20-22, 2015, Utah, USA.
- ④ Trevor Morris, Ursula Sorensen, Gary Tsuchimochi and Fumiko Inoue, UTILIZING STUDENT CONSULTANTS TO EMPOWER INSTITUTIONAL CHANGE: AN INTERNATIONAL COMPARISON, The International Consortium for Educational Development 2014, June 16-18, 2014, Stockholm, Sweden.
- ⑤ 井上史子「学び合う集団・組織の構築～学生の能動的関与が促す組織的 FD～」、第 20 回大学教育研究フォーラム、2014 年 3 月 18 日～19 日、京都大学（京都府・京都市）
- ⑥ 井上史子「組織的 FD 活動の実質化に向けて～学生による授業コンサルティング (SCOT)」プログラム導入 2 年目の現状と課題～」、日本高等教育学会第 16 回大会、2013 年 5 月 25 日～26 日、広島大学（広島県・東広島市）
- ⑦ 井上史子「帝京大学における組織的 FD 活動～学生による授業コンサルティング (SCOT)～」、2012 年度第 2 回関東圏 FD 学生フォーラム、2013 年 3 月 9 日、法政大学（東京都・千代田区）
- ⑧ 井上史子「大学授業の改善(1)～学生による授業コンサルティングの導入と訓練プログラムの開発～」、日本教育情報学会第 28 回年会、2012 年 8 月 25 日～26 日、聖徳大学（千葉県・松戸市）
- ⑨ 土持ゲーリー法一「アクティブ・ラーニングの国内外での実践例～ラーニング・ポートフォリオを中心に～」、SPOD フォーラム 2012、2012 年 8 月 23 日、徳島大学（徳島県・徳島市）
- ⑩ 井上史子「組織的な教学改善のために～知の共創サイクル構築への取組」、大学教育学会第 34 回大会、2012 年 5 月 26 日～27 日、北海道大学（北海道・札幌市）

〔図書〕（計 1 件）

- ① 沖裕貴、ナカニシヤ出版、小田隆治・杉原真晃編著『学生主体型授業の冒険 2 ～予測困難な時代に挑む大学教育～』、PART1「大講義室の学生主体型授業」、第 4 章、55-73、

2012

〔その他〕

- ① 帝京大学高等教育開発センター  
<https://apps.main.teikyo-u.ac.jp/~ct1/activitycenter/consulting.html>
- ② 日本航空機内誌「skyward」(2014 年 6 月号)
- ③ 文部科学省「大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック～大学における特色ある教育事例の把握等に関する調査研究」、(株)リベルタス・クレオ、pp. 214-215、2014

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 史子 (INOUE, Fumiko)  
帝京大学・高等教育開発センター・教授  
研究者番号：80589945

### (2) 研究分担者

土持ゲーリー法一 (TSUCHIMOCHI Gary Hoichi)  
帝京大学・高等教育開発センター・教授  
研究者番号：00422064

沖 裕貴 (OKI, Hiroataka)

立命館大学・教育開発推進機構・教授  
研究者番号：50290226

### (3) 研究協力者

- ① アントン トールマン (Anton, Tolman)
- ② スーザン エライサン (Susan, Eliason)
- ③ ウルスラ ソーレンソン (Ursula, Sorensen)
- ④ 森 玲奈 (MORI, Reina)